# 一　大学と寄付建物

◆「名前」のついた建物

全国の、あるいは世界の大学には、個人名が冠された建物が数多くあります。国内の例では、東京大学の大講堂（「安田講堂」）、早稲田大学の「大隈講堂」などがよく知られていることでしょう。ただし「名前」がつくにしてもいくつかのパターンがあります。一つは寄付者の名前が冠せられる場合、すなわち「安田講堂」や一橋大学の「兼松講堂」のような場合です。もう一つは、大学にゆかりのある教育者や研究者の業績を記念して名前が冠せられる場合で、「大隈講堂」や、最近の例では法政大学の「ボアゾナード・タワー」（東京法学校教頭ボアゾナードを記念）などがそれにあたります。

前者について、寄付者と大学の関係をみると、またいくつかのパターンに分類ができます。一つは、寄付者の業績が、その大学であつかう専門分野にゆかりが深い場合です。一橋大学の「兼松講堂」は、日豪貿易の先駆者であった兼松房治郎氏の一三回忌に際し、兼松商店から、商業教育の担い手であった東京商科大学（一橋大学の前身）へ寄付されたものです。同じよう

なものに東京水産大学と長崎大学水産学部の「中部講堂」（大洋漁業中部謙吉氏より）、鹿屋体育大学の「水野講堂」（ミズノの水野健次郎氏より）があります。こうしたいわば選択的なつながりの一方で、より非選択的なつながりもあります。まず大学出身者による母校への寄付のパターンで、鹿児島大学の「稲盛会館」（同大工学部出身、京セラの稲盛和夫氏より）がその例です。もう一つ「地縁」によるつながりもあります。名古屋大学の豊田講堂および古川図書館の場合がその例で、ともに地元の企業および企業人による寄付です。

このように、建物に「名前」が冠されている場合でもその由来はさまざまです。

## ◆寄付建物のデザイン

こうした寄付建物の設計には有力な建築家が設計に関わる場合が多く、彼らは必要面積や機能の充足にとどまらず、記念の内容や大学の将来を鑑みて、独自の哲学に基づくデザインで建物を設計しました。そうした例をいくつかご紹介します。

東京大学の大講堂「安田講堂」、一九二五（大正一四）年は、建築学科教授でのちに総長を勤めた内田祥三（よしかず）と、岸田日出刀による設計です。安田善次郎氏より寄付の申し出のあった翌年、関東大震災（一九二三年）によって本郷キャンパスは壊滅的な被害を受けました。震災後内田は安田講堂を皮切りにキャンパスの再建に取り組みます。研究者として建築の構造や防災を専

門としていた内田は、堅牢な鉄筋コンクリート造の建物でキャンパスを一新していきます。安田講堂のデザインは、近代的に解釈されたゴシック様式といえます。ゴシック様式とは、中世末期の建築様式です。当時すでに、こうした歴史的な建築様式を採る考え方の一方で、近代的なデザインの模索が活発化していましたが、内田はキャンパスの統一と連続性を保つために、保守的だが色やディテールの共通性を保ちやすい定番の様式を採用しました。安田講堂は、「耐火・耐震」「統一と連続性」という、内田のキャンパス復興の基本理念を体現する建築なのです。

一橋大学の前身校である東京商科大学も、震災によってとても大きな被害を受けました。こちらは早々に神田一橋校地の再建をあきらめ、郊外の北多摩郡谷保村（現在の国立市）に移転を決定します。この新キャンパスに最初に建設された本格的建物が「兼松講堂」（一九二九＝昭和四年）です。

兼松講堂のデザインは、垂直線が強調され天を刺すような安田講堂のゴシック様式とは対照的なロマネスク様式です。ロマネスクはゴシックよりもさらに前の中世中期の古拙な建築様式です。設計者は、東京帝国大学建築学科教授で、建築史と意匠を専門とする伊東忠太です。伊東は日本建築の研究の端緒をつけ、アジア建築とヨーロッパ建築とのつながりを模索することで日本建築の将来を考えようとした理論家です。その伊東はなぜロマネスクを採ったのでしょ

一橋大学兼松講堂

東京大学大講堂（安田講堂）

うか。当時の学内誌「一橋新聞」に伊東はこう語っています。

現代に必要なのは軽快な気分よりも鈍重な精神だといふ私の考えから、僧りょや敬虔な信者が刻苦してつくったローマネスクの様式は、素人ではあるが却って素人の真剣さから何ともいへぬドッシリとした気持ちが出ているのが尊いものである。

ところで東京商科大学は、単科大学や公立・私立大学の設置をはじめて認めた「大学令」（一九一八年）によって、前身の東京高等商業学校から昇格（一九二〇年）した大学です。教育社会学者の竹内洋は、世間からみて「高商は軽快で如才がない」イメージの学校であった、と表現しています。もしかしたら伊東は「軽快で如才のない」高商からの脱皮を期待して、兼松講堂に「鈍重」なロマネスク様式を与えたのかもしれません。兼松講堂以後の東京商科大学の建築もロマネスクを継承していま

す。キャンパス全体として重厚な雰囲気を作り出していて、伊東のねらいは成功したといえるでしょう。

このように寄付建物には、明確な設計理念に基づいて設計されているものが多く、その個性的なデザインによって大学の歴史が表され、キャンパスや大学の雰囲気まで影響を受けているといえます。

そして、こうした性格をもつ寄付建物として、名古屋大学東山キャンパスには、槇文彦（まきふみひこ）の設計による豊田講堂、谷口吉郎（よしろう）の設計による古川図書館があります。豊田講堂、古川図書館とも、戦後一九六〇年代、日本建築のモダニズムの成熟期に建築された建物です。

## ◆名古屋帝国大学創設と寄付

名古屋帝国大学が創設された一九三九年当時は、戦時体制下で軍事費の増大と不況によって国家財政はひっ迫していて、大学の創設認可には、経費の地元と大学自身による負担が条件となっていました。そこで航空機を中心とした軍需産業からの税収などをもとに愛知県が大学の創設費九〇〇万円を寄付、キャンパス用地も地元の協力で寄付されることになりました。こうした地元負担が、名古屋帝国大学創設には不可欠だったのです。同時に建設費総額一〇〇万円の講堂と図書館を建設寄付する方針が打ち出され、名古屋商工会議所によって寄付金が集めら

れました。

ところが、戦時体制下でこうした寄付金を使い切ることができないまま敗戦を迎え、戦中戦後のインフレーションによって寄付金の実質的価値が急落し、講堂と図書館の建設のためには再度資金を調達しなければならない状況になりました。このように、講堂と図書館の寄付建設の動きは創設期から進められていたわけですが、戦中戦後を経て困難な状況におちいってしまったのです。

## ◆講堂のトヨタ自動車工業からの寄付

勝沼総長による揮毫

敗戦後間もない日本において、億を超える資金を集めることは容易ではありませんでした。当時の事務局長の回想録には、資金集めに奔走する大学当局の姿が記されています。

寄付金集めも、歴史の古い大学でならば卒業生を中心に募金するという方法もあるが、若い名古屋大学にはその手はない。地元の財界人から数万円ずつを集めるにしても、創設時と違って今日では億という金はとても見込みはない。むしろ東京大学

の安田講堂のように、寄贈者の名が付くような個人寄付による方が可能性がある、そんな篤志家はないものかと、勝沼総長とよりより話し合っていた。

（須川義弘『半生を顧みる』）

その後、勝沼精蔵名古屋大学総長が各方面に奔走し、ついに一九五八年一一月二四日にトヨタ自動車工業株式会社（取締役社長 石田退三氏 当時）から建設寄付の第一報を受けたのです。しかも大学からの要請額一億円にもかかわらず、倍額の二億円の寄付を得ることができたのです。

設計者と施工者については、「設計は竹中組の嘱託で槇文彦ワシントン大学助教授が担当すること、建設は株式会社竹中組が請け負うこと」が、一九五九年三月二三日の評議会において正式に了承されました。

ところで講堂正面の壁には「豊田講堂」という勝沼総長の揮毫（きごう）があります（前頁）。寄贈者の社名であるカタカナ表記の「トヨタ講堂」とせず、漢字表記である「豊田講堂」とすることは、「発明王豊田佐吉翁を記念する意味」を込めて、一九五九年三月の評議会において正式に決定しました。

鍬入式は一九五九年三月二〇日に行われましたが、伊勢湾台風によって工事が一ヶ月遅延し、

鶴舞の医学部分館（左奥の建物）

旧第六連隊兵舎（明治村）

竣工予定日であった一九六〇年三月二〇日には間に合いませんでした。このため一部未完成ながらも一九五九年度の卒業式は豊田講堂でとり行われ、同年五月九日、トヨタ自動車工業株式会社の主催で晴れて竣工式がとり行われ、名古屋大学に授受されました。

## ◆附属図書館の歴史と建物

附属図書館は、名古屋帝国大学官制（一九三九年）に「第十七条　名古屋帝国大学ニ附属図書館ヲ置ク」とされているように、創設当初から大学の重要な一機関として位置づけられていました。当初は新キャンパスに施設がなかったので、鶴舞の医学部キャンパスの旧愛知医科大学時代（一九三二年）に新築された鉄筋コンクリート三階建ての図書館で出発しました。ちなみに、この図書館は愛知県営繕課の設計によるもので、鶴舞公園に面して建つために「都市の美観」に配慮がなされた、建築として優れたものでしたが、残念ながら病院の再開発に伴い取り壊されました。

戦後には、附属図書館は旧歩兵第六連隊が使用していた名城兵舎

に移転しました（一九四八年）。この六連隊の旧兵舎は一八七三（明治六）年に建設された白壁瓦葺の木造建築で、現在その一部は明治村に移築保存されています。

名城地区の旧兵舎は図書館用に改装されましたが、あくまでも新図書館建設までの暫定的なものでした。一九六〇年には図書館職員による建築委員会が発足し、「附属図書館建築の基本方針」の立案につづき、翌年一〇月には規模約二〇〇〇坪の「中央図書館建築計画案」を作成しています。同じ頃、名城地区を愛知県体育館の建設用地としたいという申し入れが愛知県からあり、これをきっかけに、附属図書館をはじめ本部や文学部・教育学部といった名城地区にあった組織の東山地区への移転が促進されることになりました。名城地区の名大施設の撤去を条件に、文学部・教育学部建設費の不足分と附属図書館および本部の建設費用とを愛知県が名古屋市と地元財界の応援を得てまかなうという協力が得られることになりました。

### ◆古川為三郎・志ま両氏による寄付

その後関係者が地元経済界に資金援助を要請していたところ、当時の杉戸清名古屋市長の斡旋などによって、日本ヘラルド映画株式会社会長古川為三郎・志ま両氏の篤志を得られることになりました。小橋博史による伝記によると、名古屋市の関係者から寄付の相談がもちかけられた際、古川為三郎氏は当初、約二億円の寄付依頼の半分の一億円を出すということで、あと

古川夫妻を記念するレリーフ

は財界から寄付してもらうようにと返答したのですが、志ま夫人の強い後押しで二億円全額寄付が実現したということです。当時の逸話を古川氏はこう語っています。

わしが図書館を引き受けたので、学長さんはとてもうれしかったんでしょう。靴をはくのも忘れて車に乗って帰られ、途中で気付いて戻ってこられた。それくりゃあ、うれしがらしたものだ。人の喜びというのは素晴らしいもんだよ。

（『朝日新聞』一九八七年一月三一日夕刊）

古川夫妻の意向により、設計は東京工業大学教授谷口吉郎、施工業者は大林組と決りました。総予算と坪単価から、建物の規模は延面積で約

一〇〇〇坪とされたので、建築委員会は従来の計画案を白紙に戻し、さきの「附属図書館建築の基本方針」をもとにした新たな計画を作成し、設計者に伝えました。以後、設計者から提示された平面図には何度も修正が加えられ、一九六三年一二月に工事が着手されました。

## 二　豊田講堂と槇文彦

### ◆豊田講堂の概要

豊田講堂は、一九六二（昭和三七）年度日本建築学会賞を受賞しました。『建築雑誌』に掲載された受賞推薦理由には次のように書いてあります。

この講堂は新しく発展した名古屋市の郊外に建設された名古屋大学の広い校内の中心に建てられたもので、総面積六二七〇平方メートルの内部には一六〇〇を収容する講堂のほかに、大学総長室、会議室等を含み、さらに入口の両翼に広い空間を設けて、学生の集会に便ずるなど、大学の中心建築としての多目的な機能をよく解決している。その外観は構